

# 心理学実習レポート作成における 学生間ピアレビューの効果についての検討

○中嶋智史<sup>1</sup>・柏原志保<sup>2,4</sup>・井加藤美幸<sup>3</sup>・小林隆昌<sup>2</sup>

(1 広島修道大学健康科学部・2 広島大学大学院教育学研究科・3 広島大学大学院医歯薬保健学研究科・4 日本学術振興会特別研究員)

## 目的

心理学基礎教育において、実験実習とそれに伴うレポートの作成指導は基盤となる非常に重要な科目であるが、心理学実習レポートは、形式や書くべき内容が厳密に定められていることから、初年次学生にとっては習得に困難を伴う。

近年、学生同士で発表やレポートの評価を行うピアレビュー技法が注目されており、その効果について検討が始まっている(岩佐・森, 2017)。そこで、本研究では、心理学科の初年次学生の実習レポート作成の習得過程において、学生間ピアレビュー技法が有効か否かを検討することを目的とした。まず、ピアレビューに対する学生の態度を測定する尺度を作成し、学生のピアレビューに対する態度と教員によるレポート評価との間に関連性が見られるかを検討した。

## 方法

**参加者** 心理学実験を履修している広島修道大学の学生 84 名(男性 51 名, 女性 33 名, 平均年齢 18.6 歳,  $SD = 0.7$ ) が参加した。

**調査項目** 著者全員の合議によりピアレビューの有益さ, 理解度, 積極性に関する尺度 30 項目を作成した(Table 1)。参加者は各項目について自分にあてはまるかを「1: 全くそう思わない」から「5: 全くそう思う」の 5 件法により回答した。

**手続き** 「心理学実験」の講義内において、Web 調査により実施した。実習は 2 コマ連続 15 週の授業を通してミューラーリヤー錯視など 4 つの課題を実施する形式であった。1 つの課題につき「データ収集」「実験の解説」「データ分析」「結果のまとめ」「ピアレビュー」で構成されており、学生はこれらの過程を終了した後でレポートを作成し、提出した。調査は課題 1 のピアレビューが終了し、レポートが提出された直後に実施した。提出されたレポートは教員によって形式面、内容面から 20 点満点で評価された。

## 結果と考察

**因子構造の検討** 尺度の因子構造について確認するため探索的因子分析を行った。MAP, SMC

Table 1  
ピアレビューについてのアンケート評価における因子構造と因子負荷量

項目名	因子負荷量	M	SD
有益さ ( $\alpha = .899$ )			
1 ピアレビューを行った良かったと思う。	1.064	3.86	0.93
12 今後もピアレビューを行うべきだと思う。	1.050	3.77	1.01
25 ピアレビューを行う前に比べて、自分のレポートは良くなったと思う。	.653	3.94	0.91
4 相手のレポートに対してコメントをすることは、自分のレポートを良くする上で役に立ったと思う。	.637	3.86	0.96
2 相手のレポートを読むことは、自分のレポートを良くする上で役に立ったと思う。	.623	4.30	0.71
26 ピアレビューを行う前に比べて、相手のレポートは良くなったと思う。	.568	3.60	0.91
27 ピアレビューを行う前に比べて、心理学レポートの形式について理解ができたと思う。	.557	3.89	0.94
30 ピアレビューを行う前に比べて、レポートを書くことに対する抵抗感が減ったと思う。	.552	3.05	1.14
10 相手からもらったフィードバックを自分のレポートにうまく反映させられたと思う。	.394	3.95	0.83
3 相手のレポートをチェック表でチェックすることは、自分のレポートを良くする上で役に立ったと思う。	.382	3.90	0.90
積極性 ( $\alpha = .856$ )			
13 相手のレポートをチェックする際は何度か読み直すようにした。	.841	4.12	0.92
18 相手のレポートをチェックする際に、チェック表の各項目についての自分の評価基準が正しいかを真剣に考えた。	.793	3.95	0.94
17 相手のレポートをチェックする際、実験のレジュメを参照しながらチェックした。	.657	3.69	1.23
15 相手のレポートをチェックする際、それぞれの箇所がチェック表の基準を満たしているかを真剣に考えながらチェックした。	.639	4.20	0.74
21 相手のレポートをチェックする際、自分自身がレポートに書いたことを思い浮かべながらチェックした。	.608	3.88	1.01
20 レポートの書式だけでなく、その箇所(序論・方法・結果・考察等)で書くべき内容が十分に書かれているかに注目してチェックした。	.592	4.17	0.73
22 自分のレポートを修正する際に、相手のコメントを何度か読み直して修正した。	.536	3.52	1.08
24 自分のレポートを修正する際に、自分が相手のレポートをチェックした時のことを振り返りながら修正した。	.526	3.65	1.10
14 相手のレポートをチェックする際、それぞれの箇所について、きちんとチェック表の各項目との対応づけを行いながらチェックした。	.489	4.21	0.78
23 自分のレポートを修正する際に、よく分からない部分について相手に尋ねたり、相談したりした。	.475	3.62	1.32
19 相手のレポートをチェックする際に、チェック表の各項目についての評価が難しい時に資料を調べたり、教員に尋ねたりした。	.474	3.38	1.23
16 相手のレポートをチェックする際、レポートの書き方資料を参照しながらチェックした。	.346	3.80	1.12
達成感 ( $\alpha = .815$ )			
8 チェック表を使って相手のレポートをチェックすることは難しかったと思う。*	.641	3.19	1.24
7 相手のレポートにうまくコメントできたと思う。	.637	2.75	0.97
6 チェック表を使って相手のレポートをうまくチェックできたと思う。	.571	3.42	1.03
29 ピアレビューを行う前に比べて、レポートを書くことに対する自信がついたと思う。	.538	3.20	1.04
5 自分のコメントは、相手のレポートを良くする上で役に立ったと思う。	.515	3.19	0.96
28 ピアレビューを行う前に比べて、心理学レポートを書くべき内容についての理解ができたと思う。	.451	3.85	0.80
9 相手のレポートにコメントすることは難しかったと思う。*	.445	3.87	0.94
11 相手からもらったフィードバックを自分のレポートに反映するのは難しかったと思う。*	.335	2.56	1.06

\* 逆転項目を示す  
平行分析により 3 因子が推奨された。そこで最尤法プロマックス回転による因子分析を行った結果、3 因子に対する項目の因子負荷量は概ね十分な値を示した(Table 1)。内容から第 1 因子を「有益さ( $\alpha = .899$ )」、第 2 因子を「積極性( $\alpha = .856$ )」、第 3 因子を「達成感( $\alpha = .815$ )」とした。

**教員評価との関連性** 調査実施直前に提出された課題レポートの教員評価の平均は 14.28 ( $SD = 3.16$ ) であった。課題レポートの教員評価と各因子得点との間の相関を算出したところ、有益さ( $r = .399, p < .01$ )、積極性( $r = .379, p < .01$ )、達成感( $r = .327, p < .01$ )のいずれの因子との間にも有意な相関が見られた。従って、ピアレビューに対し、有益であると評価し、積極的に関与し、ピアレビューが上手くできたと感じた学生ほど、実際のレポート評価も高いことが示唆された。

## 引用文献

岩佐・森 (2017). 就実教育実践研究, 10, 91-99.